

第43回 作文・図画岩手県コンクール作品集



ごはん お米とわたし



JA岩手県中央会

目次

◆ごあいさつ.....	1
JA岩手県中央会 会長 久保 憲雄	
◆図画部門入賞作品.....	2
◆作文部門入賞作品.....	9
◆総評.....	16
審査委員長／元岩手県教育委員会教育委員長 八重樫 勝	
◆図画部門を審査して.....	16
元岩手県図画工作・美術協議会 会長 伊藤 満久	
◆作文部門を審査して.....	17
盛岡市教育委員会学校教育課 指導主事 山下るり子	
◆コンクール入賞一覧.....	18
◆コンクール概要.....	22

図画・作文各部門

- 1 部：小学校 1 ～ 3 年
- 2 部：小学校 4 ～ 6 年
- 3 部：中学校 1 ～ 3 年



いあいわ

JA 岩手県中央会

会長 久保 憲雄

第四十三回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、作品をご応募いただきましたみなさまにお礼を申し上げますとともに、入選された方々には心からのお祝いを申し上げます。

このコンクールは、子どもたちに、お米やごはん食がどのように作られ食卓に並んでいるのか、そして、稲作が地域において、どんな役割を果たしているかなどを知っていただくことを目的として、昭和五十一年から実施いたしております。

四十三回目を迎えた今回も、県内各地から作文九四点、図画一八四点もの力作が寄せられました。この中から全国コンクールにおいて、図画部門では文部科学大臣賞に一点、学校奨励賞に一点、作文部門では優秀賞に一点選ばれました。本当におめでとうございます。

みなさまから寄せられた作品を拝見いたしますと、農家から教わりながら田植えを体験する姿やおいしそうにおにぎりをほおばる姿、また、家族と一緒に食事を作る様子やお米を作る農家、食事を準備する家族への感謝など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえており、素直な感性にあふれていました。

子どもたちの意識の高さに、あらためて目を見張るとともに、日本

農業の将来や、ごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

JAグループでは、日本の「食」とは何かを考え、その「食」を生み出している日本の農業を好きになっていただくという取組を全国的に進めております。「食」の未来をつくることは、日本の未来をつくることにつながります。その中心となるのが、古くから日本人の食卓に並び、親しまれ、日本の食文化を築いてきたお米です。

このコンクールをきっかけに、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いを知り、自分たちが暮らす地域農業について考えたことは、とても貴重な経験となったのではないのでしょうか。自然や家族、友人を大切にする気持ちや、地域の人たちへの感謝、伝統ある食文化への敬意、そして、心を込めて育てられたお米のおいしさや農業のすばらしさ、岩手の大地に対する感謝の気持ちを忘れずにいてください。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、保護者や関係者のみなさま方のご支援とご協力に心より感謝を申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。

図画部門
3部

ぜんこくもんぶかがくだいじんしょう
全国文部科学大臣賞 (全国コンクール)
いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「手作りおにぎり」

さとうみずみ
佐藤 瑞実

いちせきしりつおきたちゅうがっこう
一関市立興田中学校 1年



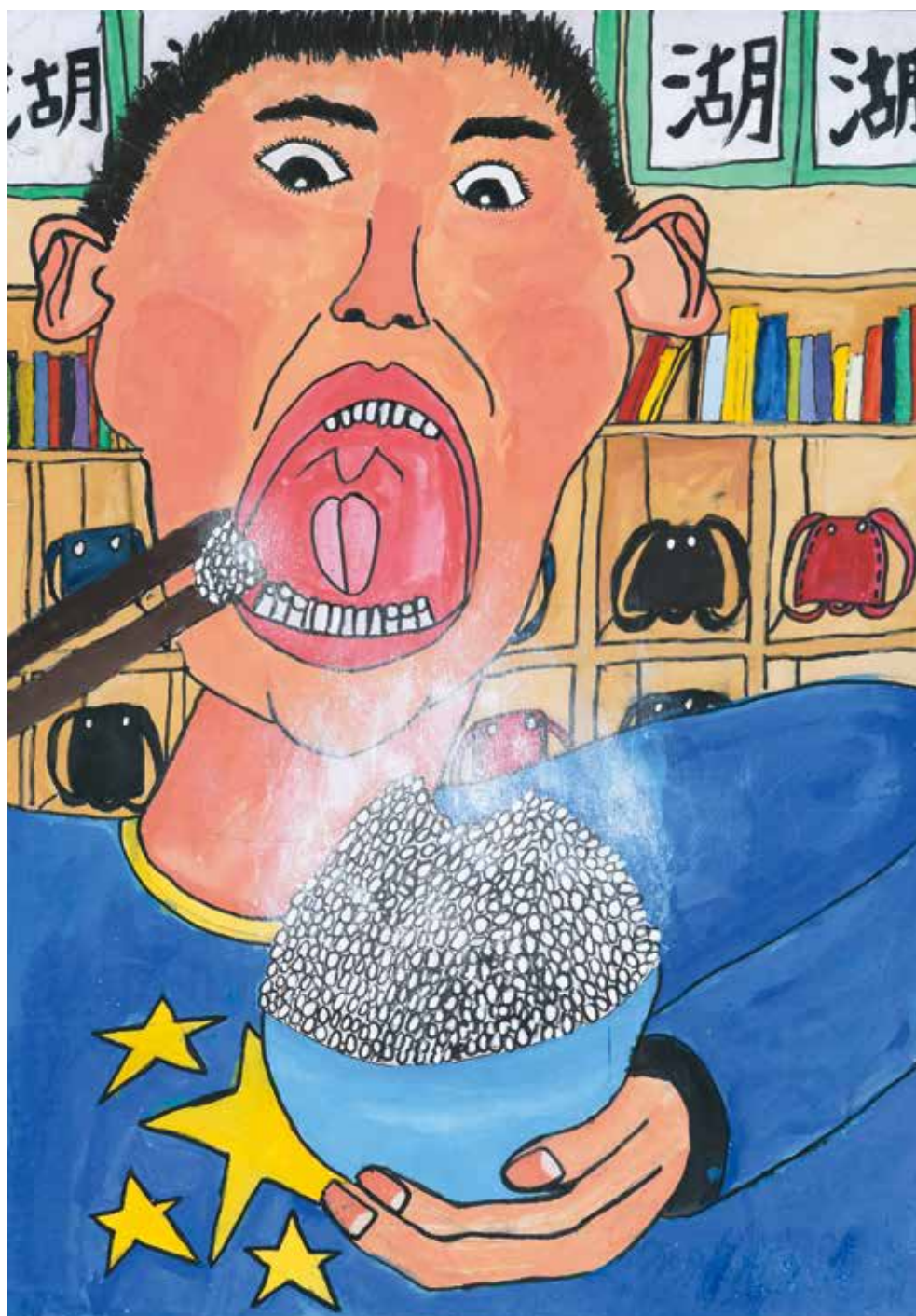
図画部門
2部

いわてけんきょういくちようしょう
岩手県教育長賞

「大好きごはん いただきます！」

のへちしゅうま
野辺地 柊 真

くのへさんりつえさしかしょうがっこう 6年
九戸村立江刺家小学校 6年



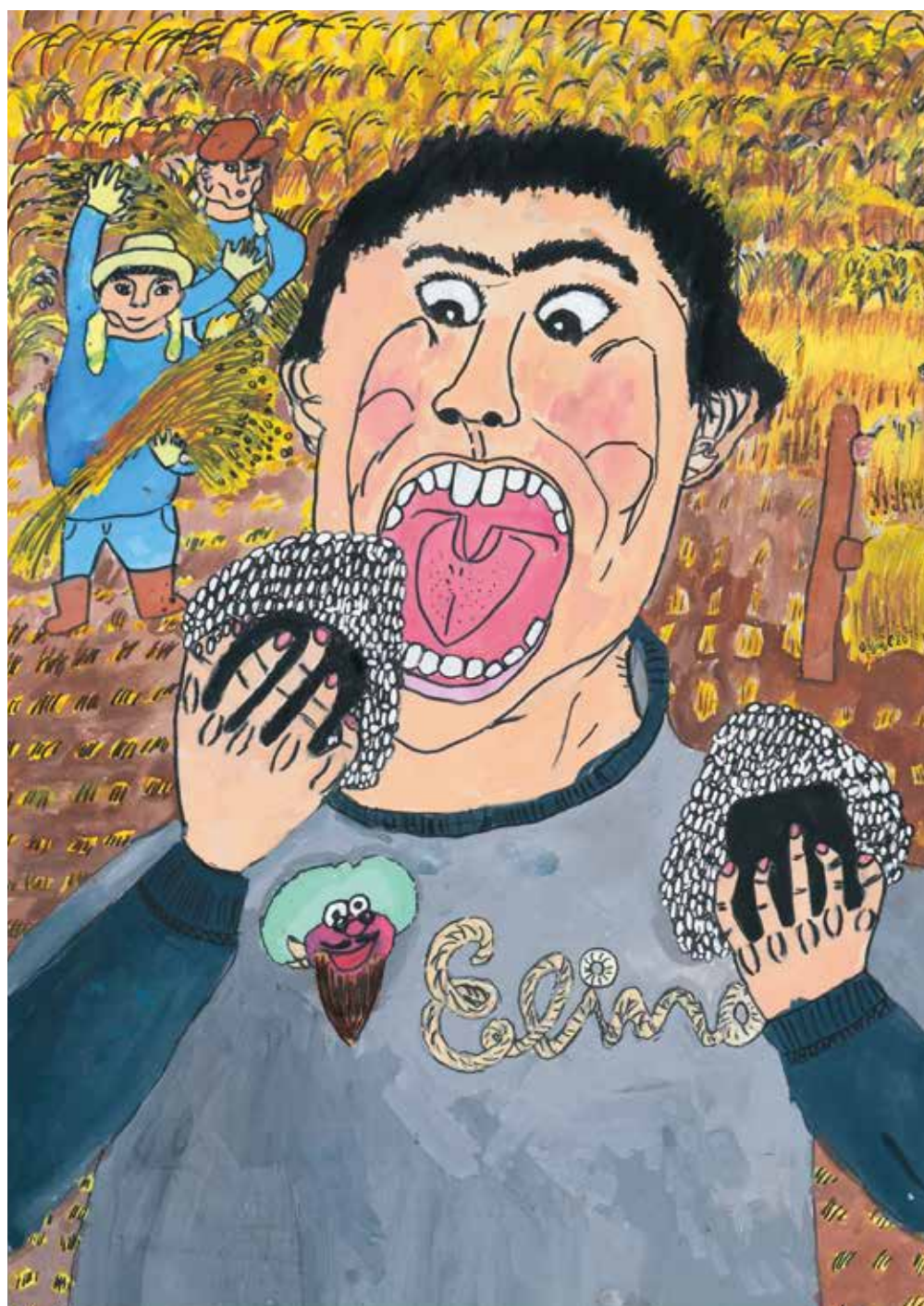
図画部門
2部

じえい いわ て けん ご れん か い ち ょう し ょ う
J A岩手県五連会長賞

「実りの秋に感謝！」

の へ ち じゅう ご
野辺地 柔 悟

くの へ さん り つ え ざ し か し ょ う が っ こ う 5 年
九戸村立江刺家小学校 5年



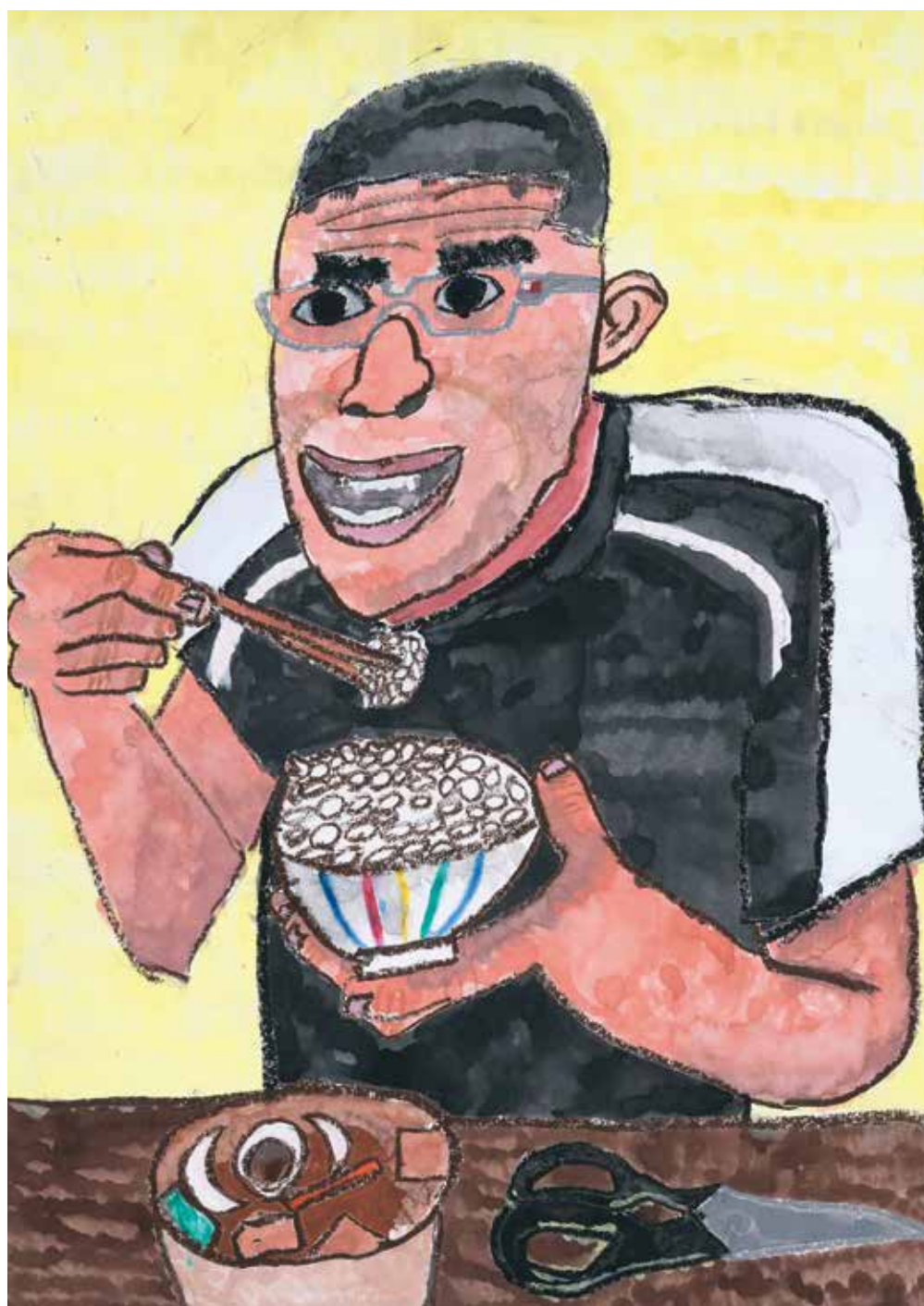
図画部門
1部

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ほっかいどうとうほくふ きゅうぶん か きょくちょうしょう
北海道東北普及文化局長賞

「やき肉ごはんをもりもりたべるパパ」

ち ば こ はる
千 葉 心 遥

いちのせき しりつたきざわしょうがっこう ねん
一関市立滝沢小学校 2年



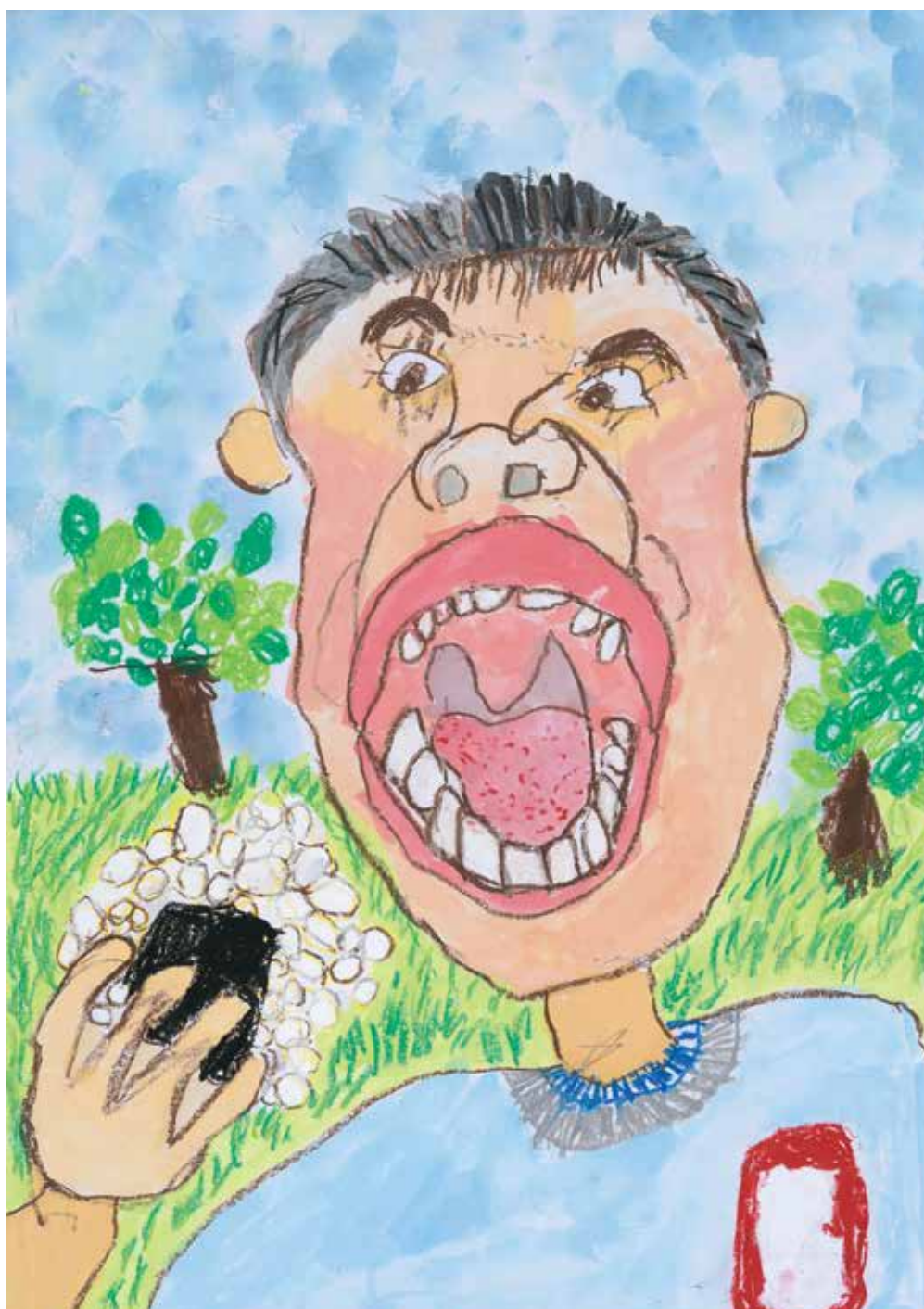
図画部門
1部

かぶしきがいしゃ にほんのうぎょうしんぶんとうほく ししよちょうしやう
株式会社日本農業新聞東北支所長 賞

「ごはんはおいしいな」

お が さ わ ら こ う た
小笠原 光 汰

くのへそんりつえさしかしょうがっこう 1ねん
九戸村立江刺家小学校 1年



図画部門
1部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「かぞく と ごはんをたべよう」

のへち と きみつ
野辺地 登希光

くのへそんりつえさしかしょうがっこう 1年
九戸村立江刺家小学校 1年



図画部門
3部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「おにぎりにぬくもりを」

おい かわ う らら
及 川 小 春

いちせき しりつおきた ちゅうがっこう ねん
一関市立興田中学校 1年



「お米の可能性」

ひら さわ か すみ
平 沢 榎 澄

いちのせき しりついちのせきしょうがっこう
一関市立一関小学校 6年



祖父の家の田んぼには、何の作物も植えられていない場所があります。幼稚園の時に、

「田んぼに、どうしてお米を植えないの。」

と祖父に聞いたところ、

「国からお米を作ってはだめだと言われているからだよ。」

と教えてくれました。普段から口数の少ない祖父でしたが、ことさらに何も話そうとしなかったことを印象深く覚えています。

昨年、学校の社会科の学習で、祖父がお米を耕作できなかった理由が国の減反政策による事を知りました。しかし、昭和四十年代から長年続けられた減反政策は、今年度から無くなり、お米を自由に耕作できるようになりました。これにより、お米の生産量が伸びるチャンスが大きくなると思います。

私はお米を毎日食べても飽きません。その理由は、白米を固めにたいたり、軟らかめにたいたり、麦や雑穀を混ぜてたいたり、米粉パンやおもちにしたりと、様々なバリエーションを楽しみながら食べているからです。そのため、ご飯の時間にお米を食べないと、食事をした気になりません。そんな大好きなお米の生産量が減少していかないように、どうしていけば良いのか、どんな可能性があるのか、私なりに二つ考えてみました。

第一に考えられることは、現在の世界の和食ブームを利用し、販売数を増やすことです。

最近、テレビや雑誌では、和食の人気について報道されています。フランスなどのヨーロッパの国々や中国では、和食が日常の食生活の一部となっているとのことです。そうした国々に対して、和食ブームという絶好のチャンスを活かし、世界最高品質と言われる日本米の輸出を増やすことを、行政などと協力しあい、進めていくことです。日本米の良さと安全性を世界中の人々に知ってもらうことで、販売してもらえる国と販売量を増やしていけるのではないかと思います。

二つ目は、日本酒の世界進出と一緒に、日本酒の原料である米の品質向上、改善を図ることです。そうすることでおいしい日本酒を作り、世界中の人々から日本酒がみつめられ、販売数の増加が期待できます。

最近、元サッカー選手の方などが、日本酒の世界販売を実施し、世界の日本酒にしようと頑張っています。日本酒の原料はお米です。世界進出に伴って、外国人の味覚に合うお米の品質改善を行うことで、販売数の拡大に貢献できるのではないかと思います。

近年、お米の消費量は減少傾向にあります。本気で考え、今までにないアイデアを出せば、消費量を増加させる方法はたくさんあると思います。なぜなら、日本のお米は農家の方々の努力の結晶だからです。そのような日本のお米を誇りに感じ、毎日おいしく食べていきたいです。

「ふるさとは雑穀王国」

伊藤 朱美怜

はなまきし りつなんじょうちゅうがっこう
花巻市立南城中学校 3年



その時私は、夢と希望に溢れていました。初めてのアメリカ旅行。私の住む花巻市と、姉妹都市提携を結ぶホットスプリングス市へ海外派遣生として、十日間のホームステイ体験をしたのが今年の十一月です。

海外旅行経験の無い私に家族が用意してくれたのが、電子レンジで温めるだけで食べられる白いごはん。そして、ふりかけでした。私は「荷物になるし、食べるものに困ることは無いからいらないよ」と断りましたが、半ば強制的に持たされました。

普段の私は、家でも学校での給食やお弁当でもお米のごはんを食べる機会が多いので、ホームステイ先での食事はとても楽しみでした。

いよいよ出発日。飛行機が離陸する前に成田空港で私が眺めていた風景は、海外から日本へ到着した沢山の外国人達だらけの回転寿司店です。そんな風景も「日本に来たら、やはりお寿司なのだろう」と見物気分でした。

翌日到着したホームステイ先には十七歳のリーちゃん居ました。リーちゃんは、日本にとっても興味が有って、少しでも話せる日本語で沢山の日本の事を質問してきました。おかげですぐに仲良くなることが出来ました。

ところが、ホームステイも三日程を過ぎるとなかなか回復しない時差ボケに加えて、日本とは違う食生活に私は少し疲れていました。

ある日、リーちゃんから私の持ってきた日本のご飯と一緒に食べようと誘われました。

リーちゃんは「オイシイ!」と喜んで食べてくれました。そして、アメリカで食べているお米との違いを表現してくれました。日本のお米は甘い香りがする。ふわふわだけど噛むとバウンドするし、ジュューシーだと。私は日本からのお米を喜んで食べているリーちゃんを見て、今まで食べてきたお米について改めて考えてみました。

私の住む岩手県花巻市は、雑穀王国として日本中に知ら

れています。花巻市内も田園地帯が広がっており、米や雑穀の高い生産量が一目瞭然です。スーパーのお米コーナーには多くの品種のお米や雑穀が売られています。ただ、そのような環境で暮らしていても私は受け身の立場でしか有りませんでした。

私の家は、昔は農家で祖母が嫁いできた頃までは、祖母も田んぼに出て米作りをしていたそうです。しかし、時代は変わって今は田んぼも他人へ貸したり違う用途として使われていて、家族が米作りに携わることはなくなってしまいました。

私も、学校の体験授業で楽しんで田植えと稲刈りをしただけで、お米作りの本当の大変さを知ることなく、これまでを過ごして来ました。

農業を営んでいる私の親戚は、後継ぎの苦勞を抱えています。これから「雑穀王国岩手」を継ぎさせるためには、田んぼの後継ぎを多くの人々が考えなければならぬ事だと思っています。例えば都会に住んでいた方が、農業に関わりをもちたいと田舎へ移住するパターンのように、そういう方々へのメリットを提供出来るような王国であって欲しいです。

これまで私は、当たり前のようにお米を食べて来ました。美味しいと思いつつもここまで有り難い物とは感じずに。米は日本の大切な食文化の中心です。私はこのことを、日本を離れた場面で知ることが出来ました。

日本へ帰国したときの成田空港は、相変わらず回転寿司店で外国の人々が食事を楽しんでいました。私は、出発の時とは違う気持ちでそれを眺めていました。「日本のお米は美味しいでしょ」と声を大にして言うほど、誇らしい気持ちで。

私が花巻に到着した時は、母が塩むすびを用意してくれていました。それを食べながら「やっぱりごはんを持っていったって良かったよ。」と笑い合いました。

「おにぎりづくり」

きく ち ゆ か り
菊 池 由佳莉

おうしゅう しりつ きぎく しょうがっこう 1年
奥州市立木細工小学校 1年



「おにぎりたべたい。」

あさおきて、おなががぺこぺこでした。

「いいよ。なにのふりかけがいい。」

おかあさんは、にこにこしていいました。

「わかめがいいなあ。」

わたしは、わかめおにぎりがだいすきです。

おかあさんは、てをみずでぬらしました。ごはんとかわかめをまぜたらみどりいろになりました。てをさんかくにして、ころんころんとてをふると、おにぎりができました。おかあさん、じょうずだなあ。わかめおにぎりのできあがり。

「あむつ。」

がまんがでなくて、ひとくちたべました。ごはんがあまくて、げんきができました。でも、まだおなかはすいています。

「ゆっかも、おにぎりつくっていい。」

おかあさんは、

「いいよ。」

といって、わたしのてをみずでぬらしました。てのひらに、あたたかいごはんをのせてくれました。わたしは、ふたつのでぎゅつとにぎってみました。

「ありやりや。」

おかあさんみたいにまわせません。ちいさななしみたい。うまいかないなあ。

もういっかいちようせん。こんどは、がんばるぞお。ぽおん、ぽおんとてをゆつくりまわしたら、さんかくになってきました。こんどは、うまいいったあ。こんどは、おかあさんがひとくちたべて、

「ゆっかがつくったおにぎり、おいしい。」

にこにこわらっていました。わたしも、なしみたいになったおにぎりをたべました。やっぱり、おかあさんがつくったおにぎりのほうがおいしいなあ。

わたしも、みんながにこにこになるおにぎりを、じょうずにつくりたいなあ。



「一粒に“こめ”られている想い」

きく ち ゆ う か
菊 池 優 花

はなまき しりつとう わ ちゅうがっこう 3 年
花巻市立東和中学校 3年



「今日から新米だぞ。うめえか？」
毎年、その年に採れた新米を初めて食べる日に、決まっ
て祖父が聞いてくる。

「うん。もちもちしておいしい。」
そう答えると「んだか。」と嬉しそうにする。その笑顔を
見ると、心が温かくなるが、同時に申し訳ない気持ちにも
なるのだ。

私の家は、米作りをしている農家だ。畑仕事もあるが、
米作りの時は家族総出でやる。私も手伝える事を小さい頃
から手伝っていた。しかし中学生になってから、テストや
部活動で忙しく、手伝いの頻度がめっきり減ってしまった
のだ。毎年田植えや稲刈りの時期に話が始まるので、部
活の予定などチェックする。すると、思った通り。吹奏楽
部の活動と重なる。特に秋は演奏会をひかえている為一日
がかりで活動することが多い。部活がないとしても、テス
ト期間に重なっていることもある。それを家族は分かっ
ていて、事前に言うのだ。

「明日から田植えだから、部活歩いて帰ってきてちょうだ
い。間に合うようにするけど。」

「明日稲刈りの手伝いしなくて良いから、勉強頑張れよ？」
学生は勉強を優先しなさい、と遠回しに言われている気
もするが、私の事を考えてくれているからだと思う。だか
ら素直に受け取るのだが、こうして、私は手伝いをするこ
とが減ってしまったのだ。

この状態が何年間と続き、ふと考えた。私は米作りにと
のくらい関わってこれたのか、これから関わっていきけるの
か。せっかく自分の家で作っているのだから、学べること
が沢山あるはず。そう思った。私は、今まで自分がやって
きたことを思い返してみた。田植えの時は、苗箱を洗った。
泥と根がびっしり付いていて、それを取って綺麗にしてい

た。力がなくてもできるので、小さい頃からやってきた。
妹や母と楽しく話をしながら、競争していたのを思い出し
た。秋になると、稲刈りがやってくる。収穫の時期だから、
今でもやっぱりわくわくする。私の家では、はせ掛けをし
ている。幼い頃から見えてきていたので、今はあまりやらな
くなってきていることを知らなかった。刈りとった稲をは
せに運んで、走り回った。小学校高学年ごろは、実際には
せに稲をかける手伝いもした。意外とやってみると難しく、
こだわりがあったことに気づくのだ。家ごとにさまざまな
やり方があり、土地や地域によっても変わるんだよ、とい
う話を聞いたのも思い出した。今思うと、すごく面白いし、
知恵が詰まった奥深さも感じられる。

私はまだまだ知らないことがたくさんある。けれども、
自分たちの家でとれたお米を食べられる喜びや、米づくり
の大切さは、きつと分かっていると思う。今食べているお
米もとてもおいしいが、少しでも米作りを手伝って、お米
が育つのを自分の目で感じていたほうが、ずっとおいしい。
それに、一粒に対する思いも変わる。お米を食べ残すこと
に抵抗があるのはもちろん、感謝の気持ちが強くなるのだ。
父からこんな話を聞いた。

「農家はずっと勉強してるんだ。試行錯誤をくり返して、
やってきてるんだ。」

何でもそうかもしれないが、最初から上手くいくことな
って滅多にない。だから、よりおいしいお米を目指して、
沢山考えて、悩んで、実行して…。私は、そんな家族を尊
敬しているし、農家に生まれてよかったと心から思う。だ
から、次はきちんと心から言おうと決めた。

「私にできることはない？」
米作りの大変さも魅力も、全部知りたいから。出来ること
から少しずつ。そしていつかは、父母や祖父のように。

「おいしいお米を作りたい」

た な か ゆ う と
田 中 優 翔

いわて ちやうりつ いっかた いしやうがっこう 5 年
岩手町立一方井小学校 5年



ほっこりするあのにおいが、ぼくは好きだ。そう、お米のにおい。そして、キラキラとお米が光っている。

総合の学習の時間にお米についての授業があり、田植えをする機会があった。昨年から取り組んでいる「田んぼアート」に挑戦しようというものだ。なぜ岩手町で「田んぼアート」に挑戦することにしたのかを考えた。ぼくが予想していた通り、農業に興味を持ってもらいたい、たくさんの方が一方井に来てほしいという町おこしのためだった。

今年は、デザインからぼくたちが考えた。五年生みんな、デザインを一生けん命出し合っている、どうなるのかわくわくした。そして、一方井出身の南部はんのとのさま、南部信直公をイメージしたキャラクターのデザインに決まったとき、「すごい挑戦になるぞ」と思った。

楽しみにしていた田植え当時、さっそくはだしでどろに入った。そのかんしよくがぬるつとして気持ちいい。どろに足をとられて体せいをくずして転び、服がどろだらけになっていた。けれども、みんなで声をかけ合ってはげまし、一生けん命田植えをした。展望台から見た田んぼは、ぼくらのかくとうのあとが残っていた。もっともっと田植えをしていきたい気持ちになった。

ぼくは、いろいろな作業ですごくつかれたし、くたくたになった。五年生の社会で学習した通り、たくさんのお米を毎日やすまざることは知っていたが、これほどにもこ

しがいたくなり、歩くのがむずかしいとは思っていなかった。そして、このようなつらい仕事をぼくだったら、きつととつくにやめていると思った。ぼくは、米づくりに日々はげんでいる人たちを尊敬するし、あこがれる。

それは、ぼくの祖父であり、祖母だ。ぼくの家でも、お米を作っている。けれど、田植えや稲刈りなど都合が合わず、全部祖父母がやっている。二人にこんな大変な仕事を全部やらせるわけにはいかない。これからは、たくさん手伝いたいと思った。

夏休みに展望台に上がった時、イメージしていた以上に稲の色合いがきれいだった。「これなら、みんなが来てくれるぞ」と思った。ぼくらの田んぼアートを見て、「あ、おもしろそうだなあ」と思って農業に興味をもってほしい。そして、たくさんの人たちにお米のすばらしさが伝わって、お米が好きになってほしいと思った。

田んぼアートの取り組みを通して、農家の方々の「おいしいお米を届けたい」という思いを感じた。食べ物を作る人はみんなそんな思いを持っているんだなあと思った。自然と感謝の気持ちがわいてくる。祖父母の世代で米作りを終わらせたくない。ぼくは、このお米づくりをつぎたい。そして、すごくおいしいお米を作りたい。

「一つぶのお米」

菊池 伶史

奥州市立木細工小学校 5年



一つぶのお米を見ると、農家の方々の、たくさん農作
業の光景が頭にうかびます。

ぼくは、一年生から毎年、学校の田んぼで米作りの体験
学習をしています。この学習を通して、米作りの大変さや
やりがいなどを知ることができました。

春の種まきは、まんべんなく平らにまき、種が多いところ
は筆でなりました。こえちらしは、田んぼのすみずみ
までたいひをちらしました。しろかきは、土のかたまりを
細かくほぐして、なえが根をはりやすくしました。田植え
は、田んぼにかかれた線の通りに、まっすぐ、なえとなえ
が近づきすぎないように植えていきました。いねかりは、
五かぶぐらいかつたら、わらを使って束にして、はせにか
けました。はせがけは、いねの束が風に飛ばされないよう
にすき間をつめてかけました。せんばこきや足ぶみだつこ
く機でだつくくする時は、春男さんにアドバイスをもらい
ながらいねの束を少しずつ分けて、もみをいためないよう
にいていねにだつくくしました。

米作り体験で特に楽しかったのは、田植えです。なえを
受け取るのに失敗して、なえが田んぼのどろの上に落ち、
ぼくの服にどろがついたとき、みんなで大笑いしました。
みんなが笑顔で田植えをしていたことが心に残っていま
す。このなえが大きく育ち、秋には実って、いねかりにつ
ながってほしいと思いました。せ中がいたくなったらけれど、
田植えをすることに、とてもやりがいを感じました。

一番大変だったのは、いねかりです。長い時間こしを曲
げてかかっていると、こしがいたくなりました。かたいね
を束ねて、わらで結ぶのがうまくできなくて大変でしたが、
田んぼの先生の春男さんに、

「一年ごとにうまくなっているな。」

とほめられて、やる気が出ました。

みんなで育ててしゅうかくしたお米は、春男さんに精米
していただきました。精米されたお米を見ると、一つぶ一
つぶが白くすき通り、きらきら光っていました。ダイヤモ
ンドのような形をしていて、まるでほう石みたいでした。

一つぶのお米には、大変だったことや楽しかったこと、
やりがいを感じたことなど、みんなで協力して米作りをし
た思い出がぎゅぎゅつまっていました。ぼくが植えたなえ
も大きく育ち、きらきら光るお米になったと思うと、いま
でがんばってきたかいがあつたと思うと、とてもうれしくな
りました。

ぼくは、米作りの体験を通して一つぶのお米には、お米
を育てた人の楽しさや、苦労や願いがまつていることを
知りました。

ぼくは、これからも農家の方々のたくさん思いがつ
まつているお米を、一つぶ一つぶ残さずに食べたいと思
います。そして、今年も、来年も、おいしいお米ができるよ
うに、米作りを楽しみたいと思います。

「おこめとぼく」

佐藤 琥太郎

花巻市立宮野目小学校 2年



ぼくのあさごはんは、まい日、ごはんです。おかあさんたちは、パンです。ぼくは、ごはんが大好きなので、ぼくだけごはんです。なぜ、こんなにごはんがすきかというところ、ぼくのおじいちゃんが、ふくしまでおこめをつくっていて、そのごはんがとてもおいしいからです。おじいちゃんがつくったおこめでたいごはんは、もっちりしていて、ほんとうにおいしくてなんばいでもたべられます。たくあんとめんたいがあれば、さいこうです。たった二回、おかわりしただけでも、おかあさんに、

「たべすぎっ。」

と、おこられます。そんなときは、もつとたべたいのになあと、ぼくは、きげんがわるくなります。

おこめのつぶは、ひよる長くて、とても小さいです。一さいのぼくのおとうとはより小さいです。たく前は、かたいのに、たくとやわらかくなって、おいしくなるのは、とてもふしぎです。一つぶだと、とてもかるいけど、おじいちゃんからおくられてきたおこめのふくろは、すごくおもいです。いっぱいこめつぶが入っているからです。

神戸のおばあちゃんから聞いた話だけど、むかしは、さむいところでは、おこめができなかったそうです。さむいところでもできるようにけんきゅうした人たちは、ほんとうにすごいです。ぼくもおとなになったら、体にいいごつこくまいをけんきゅうして、ふくしまのおいしいちゃんにた

べてほしいと思っています。そして、もうなくなってしまったけど、はたけしごとがとくいだったおばあちゃんのぶんまで、長生きしてほしいです。ぼくが、おいしくて、体にいいごつこくまいをつくるまで、たのしみにまっています。

ぼくは、四月にあさひかわから花まきにてん校してきて、田んぼのよこを四十分あるいて学校へかよっています。花まきのおこめがどんなあじなのかなあと、まい日たのしみしています。早く花まきのおこめもたべてみたいです。



総 評

審査委員長

元岩手県教育委員会
教育委員長



八重樫

勝

第四十三回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに今年もたくさんの作品が寄せられました。

その中から全国コンクールの図画部門で、一関市立興田中学校一年佐藤瑞実さんが全国二位に当たる文部科学大臣賞を受賞する快挙がありました。また、作文部門でも一関市立一関小学校六年の平沢榎澄さんが優秀賞を受賞しました。これは岩手の児童生徒の力が高く評価された証でもあります。

県コンクールは十月に第一次審査会、十二月に第二次審査会を開き、岩手県知事賞以下各賞を決定しました。受賞された皆さん、ご家族、指導にあられた先生方、関係の皆さん、おめでとうございます。

学校奨励賞は作文部門が花巻市立南城中学校、図画部門が一関市立興田中学校です。学校を挙げて取り組んでいること、すぐれた作品が多いことなどが評価されました。

〈作文の部〉

- ・「ごはんやお米にまつわる「出来事」を家族との触れ合いを通して素直に表現している。
- ・「ごはんやお米に対する「思いや考え」を自分の体験を通して、構成や展開を工夫しながら、筋道の通った文章にしている。
- ・題材が「稲作体験」や「食事」のみならず「田んぼアート」や「減反政策」等、多岐に渡っており

視点の広がりを感じさせる。

- ・「食」に関連するエピソードをもとに「感謝の念」「郷土愛」等を強調し、構成や表現を工夫することによって効果的にまとめている。
- ・「食品ロス」というキーワードで「米の大切さ」「食糧の重要性」にせまろうとした作品が多かったのも印象的。

〈図画の部〉

- ・応募された作品は完成度の高い秀作が多く、夏休み後に学校で更に補作し、校内で選ばれたと想定される。
- ・特に、入賞した作品は本コンクールの主旨に合致したものばかりであり、お米を大切にしている様子がよく表現されている。
- ・一部では技法の巧みさより、おにぎりがおいしいなどの感動の表現、二部ではそれを生かすような背景の工夫、三部では画面の効果的な構成（レイアウト）と、発達段階に即したすばらしい作品が多かった。
- ・入賞作品の共通点として、ていねいできめ細かな描写、人物の表情の豊かさ、淡色から混色、重色と多様な色彩の工夫等、心をこめた制作への姿勢がよく伝わってくる。
- ・これらの作品は本人の取り組みはもちろんのこと、主食である米の大切さを十分理解し広めようとしている地域環境の成果でもあり、岩手の誇りとも言える。

全体を通して、単にお米大切、おにぎり大好きだけではなく、食糧について、農業について、働くことについて、家族との触れ合いについて等、幅広くテーマを取り上げていることはとてもうれしいことでした。

日々変化する社会の様子に目を向け、「ごはん・お米」を通して物事を観察し、来年も作品作りに挑戦して下さい。

図画部門を審査して

元岩手県図画工作・美術協議会
会長



伊藤満久

受賞された皆さん、受賞校、おめでとうございます。又ご指導された先生方やご家族の方々もさぞお喜びのことと思います。

今年度も県内全地域から校内で選ばれた優れた多くの作品が応募されました。その中から全国へ九点推薦した結果、文部科学大臣賞に一点（内閣総理大臣賞に次ぐ賞）入賞するというすばらしい成果を挙げました。ここでは県審査で受賞した優秀賞以上の作品について選評いたします。

全国文部科学大臣賞と知事賞を受賞した佐藤瑞実さん（一関市立興田中一年）の「手作りおにぎり」は中心におにぎりを作ろうとしつかり握っている手を大きく描き、集中している目線、輝くようないっぱいのごはん、卓越したデッサン力と質感溢れる色調と、まさに主題に合致した完成度の高い作品です。

次に県教育長賞の野辺地終真さん（九戸村立江刺家小六年）の「大好きごはんいただきます」の湯気のたちこめる井いっぱいのごはんを今まさに食べようとして口を大きくあけている迫力ある秀作です。

J A岩手五連会長賞受賞の野辺地柔悟さん（九戸村立江刺家小五年）の「実りの秋に感謝」は、おにぎりをほおばっている力強い大きな口と目線が一体となって好感度いっぱいの作品です。更に背景に稲刈りに精を出している人々を描くなど、お米の大切さを強調しています。家の光協会北海道東北普及文化局長賞の千葉心遙さん（一関市立滝沢小二年）「やき肉ごはんをもりもりたべるパパ」は、まさに農業をしているであろうたくましい父親が労働の後

においそくに食べている情景が十分伝わってくるような力作です。

次に日本農業新聞東北支所長賞を受賞した小笠原光汰さん（九戸村立江刺家小一年）の「ごはんおいしいな」は画面いっぱい口を中心に大きく描き、一口でおにぎりを入れてしまいたいという思いが溢れている力作です。

県で優秀賞を受賞した二点ですが、まず及川小春さん（二関市立興田中一年）「おにぎりにぬくもりを」は、おにぎりを握っている手の迫力ある表現、着彩での立体感、勿論人物の確かなデッサン力等かなり表現力の高い秀作です。もう一つの優秀賞は野辺地登希光さん（九戸村立江刺家小一年）です。「かぞくとごはんを食べよう」の題名のとおり、家族皆で賑やかにおいそくににおにぎりをほおばっている楽しい雰囲気伝わってきます。真ん中に自分でしようか、着ているTシャツの模様などに自分への思いを強調しており好感が持てる作品です。

これら受賞した作品の他にもすばらしい作品が沢山ありました。それらに共通していることは、日本人の主食であるお米の大切さ、農家の人々への感謝の心が伝わってくるものばかりでした。これからも描くこと通して、一層豊かな心を育てる取り組みを願ってやみません。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会
学校教育課 指導主事

山下 りり子

本文コンクールに、今年度も多くの学校、児童生徒の皆さんが応募してくださいました。どの作品も、自分の生活と「ごはん・お米」との関わりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることに嬉しさを感じます。

全国の優秀賞と岩手県知事賞を受賞した平沢榎澄さん（一関市立一関小学校六年）の「お米の可能性」は、「和食ブーム」「日本酒世界進出」といった米販売量拡大の提案について、根拠を明らかにしながら自分なりに考え、説得力のある文章構成と表現でまとめた、大変優れた作品です。

岩手県教育長賞を受賞した伊藤朱美怜さん（花巻市立南城中学校三年）の「ふるさととは雑穀王国」は、海外ホームステイの経験を通して、あらためてお米のおいしさを実感し、郷土花巻と日本の食文化への誇りを高めていく心の変容を、効果的な構成で印象的に書きまとめた、読み手を引きつける秀作です。

J A岩手県五連会会長賞を受賞した菊池由佳莉さん（奥州市立木細工小学校一年）の「おにぎりづくり」は、おにぎり作りの様子を、色・形・音・温度・味が伝わる五感を使った表現で、生き生きと書き表した臨場感溢れる力作です。小さな手で握られたおにぎり笑顔で見守るお母さんが目に浮かび、心が温まります。

家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞した菊池優花さん（花巻市立東和中学校三年）の「一粒にこめられて想い」は、家族の支えに感謝

しながらも、稲作から疎遠になっていく現状との葛藤を通して、稲作の奥深さと自分の生き方についての考えをまとめた、読み応えのある作品です。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した田中優翔さん（岩手町立一方井小学校五年）の「おいしいお米を作りたい」は、田んぼアートという新しい視点から稲作を見つめ直し、あらためて稲作に関わる人への尊敬や郷土への愛着を深め、自分も農業に携わりたいという強い決意で結ぶ、読み手に新鮮な感動を与える作品です。

優秀賞を受賞した佐藤琥太郎さん（花巻市立宮野目小学校二年）の「おこめとぼく」は、ご飯が好きな理由、米や稲作に対する関心について、素直な表現と読みやすい文の組み立てでまとめている作品です。今年転入し、初めて食する花巻の新米を楽しむに待っているという結びも印象的です。

同じく優秀賞を受賞した菊池怜史さん（奥州市立木細工小学校五年）の「一つぶのお米」は、稲作体験を五年間続けた怜史さんならではの、稲作に関する知識や作業の描写に感心させられます。お米に対する思いや稲作への関心が、整理された段落の構成によって、読み手に素直に伝ってくる作品です。

学校奨励賞は、花巻市立南城中学校です。応募作品数も多く、そのすべてが構成及び表現に優れ、うち一作品が入賞した実績が高く評価されました。

入賞作品は勿論のこと、応募された多くの作品から、日本の主食であるお米への感謝の気持ち、温かな家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着がよく伝わってきました。今後、多くの子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしていただくことを期待して、講評といたします。

【全国コンクール】

◆文部科学大臣賞

佐藤 瑞実

一関市立興田中学校

1年

「手作りおにぎり」

◆学校奨励賞

一関市立興田中学校

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

佐藤 瑞実

一関市立興田中学校

1年

「手作りおにぎり」

◆岩手県教育長賞

野辺地 柊真

九戸村立江刺家小学校

6年

「大好きごはん いただきます！」

◆JA岩手県五連会長賞

野辺地 柔悟

九戸村立江刺家小学校

5年

「実りの秋に感謝！」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

千葉 心遥

一関市立滝沢小学校

2年

「やき肉ごはんをもりもりたべるパパ」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

小笠原 光汰

九戸村立江刺家小学校

1年

「ごはんはおいしいな」

◆優秀賞

野辺地 登希光

九戸村立江刺家小学校

1年

「かぞくとごはんをたべよう」

及川 小春

一関市立興田中学校

1年

「おにぎりにぬくもりを」

◆学校奨励賞

一関市立興田中学校

◆佳作

【1部】

櫻田 真尋 北厨川小

1年

「おにぎりおいしいな」

佐々木春輔 内川目小

2年

「おいしいおにぎり

いただきます」

若槻ももこ 平泉小

2年

「おかあさんがつくってくれた
こんぶのおにぎりはおいしい」

岩谷 美風 岩谷堂小

3年

「だまこもち作り」

柳田 優太 内川目小

1年

「はやちねさんでたべた

おにぎり」

獅子内祐希 二戸西小

3年

「ぼくのすしは、うまい!!」

【2部】

菊池 由衣 江釣子小

4年

「お母さんのおにぎり

おいしい!」

渡邊こはる 江釣子小

6年

「小昼（こびる）」

佐藤 真尋 江釣子小

6年

「農家の皆さん

おいしいお米ありがとう」

鈴木 蒼依 湯口小

5年

「2人で朝ご飯」

前田 悠佳 湯口小

5年

「夢中になる田植え」

岩淵 稀生 佐倉河小

5年

「お米とわたし」

佐藤地日向 真城小

5年

「ごはん・お米とわたし」

【3部】

岩渕 姫奈 萩荘中

2年

「一粒一粒大切に」

妻神 知沙 見前中

1年

「このおにぎり…

中身は何だ!？」

阿部美楽乃 見前中

1年

「母の目には私の笑顔」

横沢 陽菜 見前中

1年

「わが家のカレーライス」

小澤美桜里 西根中

3年

「豊穰」

坂井 瑞希 下橋中

1年

「お母さんのつくってくれる

あったかおにぎり」

佐藤 千栞 矢巾北中

3年

「お母さんへのおかゆ」

大山 月詩 見前中

1年

「いっぱい食べたね」

作文部門入賞

【全国コンクール】

◆優秀賞

平 沢 榎 澄 一関市立一関小学校 6年 「お米の可能性」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

平 沢 榎 澄 一関市立一関小学校 6年 「お米の可能性」

◆岩手県教育長賞

伊 藤 朱美怜 花巻市立南城中学校 3年 「ふるさとは雑穀王国」

◆JA岩手県五連会長賞

菊 池 由佳莉 奥州市立木細工小学校 1年 「おにぎりづくり」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

菊 池 優 花 花巻市立東和中学校 3年 「一粒にこめられてる想い」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

田 中 優 翔 岩手町立一方井小学校 5年 「おいしいお米を作りたい」

◆優秀賞

菊 池 怜 史 奥州市立木細工小学校 5年 「一つぶのお米」

佐 藤 琥太朗 花巻市立宮野目小学校 2年 「おこめとぼく」

◆学校奨励賞

花巻市立南城中学校

◆佳作

【1部】

玉澤歩風乃 藤沢小 3年 「むげんのお米」

池田 悠花 若葉小 1年 「だいじにたべるよ」

芦萱 陽菜 舞川小 2年 「ごはん・おこめとわたし」

【2部】

菊池 美桜 木細工小 4年 「もち米ごはん」

菊池 苺 木細工小 4年 「おぼん」

菊池 望夢 木細工小 5年 「遠野のおじさんに

感謝して」

千田 大翔 胆沢第一小 5年 「米どころ、岩手」

平沢 水妃 一関小 5年 「お米ができあがるまで」

作並 希星 油島小 5年 「元気の源はごはんから」

【3部】

小野寺利輝 東山中 1年 「支え合い」

小野寺一翔 一関二高附属中 3年 「お米でつなが絆」

佐々木新之助 一関二高附属中 2年 「母のおにぎり」

黄川 克斗 越喜来中 3年 「感謝を忘れずに」

八幡 恵佳 山形中 2年 「日本の宝を守るために」

角嶋 優美 宿戸中 3年 「おなかすいた〜。」

大久保 彩 川井中 1年 「お米と関わりながら

生きていく」

古里 天舞 金田一中 3年 「ごはん・お米とわたし」

第43回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画岩手県コンクールの概要

応募点数

学 校	作 文	図 画	合 計
小学校	16	152	168
中学校	78	32	110
計	94	184	273

応募締切日

平成30年9月7日

県コンクール第1次審査会

平成30年10月12日（全国コンクール推薦作品18点を決定）

県コンクール第2次審査会

平成30年12月13日

表彰式

平成31年1月23日 盛岡市「ホテルルイズ」

主催

岩手県内JA・JA岩手県中央会

後援

岩手県・岩手県教育委員会・いわて純情米需要拡大推進協議会
一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所
JA岩手県信連・JA岩手県厚生連・JA全農いわて・JA共済連岩手

審査員（敬称略）

審査委員長	八重樫 勝	元岩手県教育委員会教育委員長
審査委員	伊藤 満久	元岩手県図画工作・美術協議会会長
審査委員	山下 るり子	盛岡市教育委員会学校教育課指導主事
審査委員	山口 英寿	（一社）家の光協会北海道東北普及文化局局長
審査委員	小島 慶太	（株）日本農業新聞東北支所副支所長
審査委員	小原 繁	岩手県農林水産部県産米戦略室県産米戦略監
審査委員	鈴木 邦彦	JA岩手県信連代表理事専務
審査委員	橘 幸広	JA岩手県厚生連常務理事
審査委員	畠山 俊彰	JA全農いわて県本部長
審査委員	佐々木 善昭	JA共済連岩手県本部長
審査委員	小澤 隆一	JA岩手県中央会副会長

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

JA岩手県中央会 JA総合対策部 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519
ホームページ<http://www.ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp



さあ、みんなで取り組んでいこう。
やっぱり国産農畜産物推進運動
～みんなのよい食プロジェクト～

発行／平成31年1月23日 企画・編集・発行／JA岩手県中央会 印刷・製本／川嶋印刷株式会社